

PARIS
EIGA
COLTD.
巴里映画

1986年度 カンヌ映画祭審査員賞

1986年度 シカゴ映画祭シルバーユーゴー賞

1987年度 ロッテルダム映画祭KRO賞

1987年度 セザール賞

作品賞 監督賞 新人女優賞 脚本賞 撮影賞 編集賞

テレーズ

生きるにはあまりに短かく、
愛するにはあまりに永い…ジーザスに
恋した聖少女、その究極の純愛。

Therese

1986年度 フランス映画
AFC Films/A2/CNC作品
カラー作品
配給 巴里映画



物語

テレーズはマルタン家、5人姉妹の末っ子。母は幼い時死亡し、父の手ひとつで育てられた。幼時期から繊細で、いつも夢見る少女だった。

上の姉2人、マリールとポーリーヌはすでにカルメル会の修道女だったから、早くからその影響をうけて、自分もやがて修道女になるのだと思っていた。やがて15才の春、晴れてテレーズはカルメル会修道院の門をくぐる。

フランスは北の寒村、リジューのことである。

父は反対する。末っ子ということもあるが、とりわけ厳しい戒律のカルメル会に幼い娘を預けるということに耐えられなかったのだ。しかしテレーズは懇願し、ようやく許可される。

彼女の信仰の中心はもちろんイエスだが、15才という年齢がそうさせるのか、彼女はいつの日にかイエスを一人の青年として憧れていることに気がつく。そのころ、第1回の咯血が彼女を襲った……。

THÉRÈSE テレーズ

Alain CAVALIER
Camille DE CASABIANCA
Philippe ROUSSELOT
Alain LACHASSAGNE
Bernard EVEIN
Yvette BONNAY
Isabelle DEDIEU
Maurice BERNART
Catherine MOUCHET
Aurore PRIETO
Sylvie HABAUT
Mona HEFTRE
Jean PELEGRI
Hélène ALEXANDRIDIS
Clémence MASSART

アラン・カヴァリエ 監督
カミーユ・ド・カサビアンカ 脚本
フィリップ・ルーセロ 撮影
アラン・ラジャサーニュ 音響
ベルナル・エヴァン 美術
イヴェット・ボネイ 衣装
イザベル・デデュー 編集
モーリス・ベルナル 製作
カトリーヌ・ムーシェ
オーロール・プリート
シルヴィー・アポールト
モナ・エフトル
ジャン・ベルグリ
エレース・アレクサンドリディ
クレマン・マサール



解説

19世紀末に生まれた1人の少女が、ジーザスを1人の青年として憧れ、恋し、その想いに導かれて深い信仰の道に入る。厳しい戒律の中で、霊的なまでに自己を高めていったその少女は、何度かの咯血の後、ついに天に召される――。

死後半世紀して彼女は聖女の列に列せられた――カトリック信者なら、知らぬものとしていない「聖少女、テレーズ・マルタンの短かくもはかない生涯を美しい映像で綴る純愛ストーリー。それがアラン・カヴァリエ監督の「テレーズ Thérèse」だ。

実在の少女テレーズ・マルタンは1873年フランスの北、アランソンに生まれ、15才でカルメル会の修道院に入った。汚れを知らないこの少女は、思春期特有の繊細な感性で家族や友人、淡い初恋、そしてジーザスへの憧憬自然、社会、大人といった目に映ること、心をよぎるさまざまな思いの全てを日記や詩に書きとめた。それらは死後数年たって「魂の記録」として出版され、ベストセラーになっ

た。修道女、といういわば特殊な青春を送った少女だとしても、その感性の水たしさが、やはり万人の胸をうったのである。

映画は、この原作をもとに組立てられている。カヴァリエ監督はこの「魂の記録」という彼女の著した原題を忠実に生かすために、そのスタイルを苦勞して造りあげる。それはすべてのシーンを室内劇ふうの演出でまとめことだった。そのためにセットを極力簡素にし、色彩を抑制し、照明に神経を配り、衣装をシンプルにし、といった具合でその結果が「繊細な装飾模様」、「アーヴィング・ペンの写真を想起させる」などの批評を引き出す映像芸術に結実したのだった。

夾雑物をドンドン捨てさり、ほとんどジーザスに近づいていってしまうという、極めて自己犠牲的な内容が、この飽食の時代に逆に新鮮だったということは確かである。

はたせるかな、世間はこの「テレーズ」に対して冷淡ではなかった。まず1986年、カンヌ国際映画祭で審査員賞を受賞し、満を持して同年9月、パリで封切られると、26万人の動員というヒットとなった。その余勢をかっ

て12月のクリスマス・シーズンにニューヨークでも公開されると、直ちに10都市での拡大ロードショーという好結果を生む。そしてフィナーレは87年の3月7日、フランスのアカデミー賞といわれるセザール賞でなんと作品、監督、脚本、新人女優、撮影、編集の6部門での受賞というブッチギリの「圧勝」となってしまう。『テレーズ現象』極まれり、といったところだ。

さて、監督のアラン・カヴァリエは日本公開作は「さすらいの狼」④「別離」⑧の2本のみという監督だが、実際本国でも25年間に9作という「寡作の人」である。しかしその丁寧な映像づくりには定評がある。

新人女優賞に輝いたテレーズ役のカトリーヌ・ムーシェはパリの国立演劇学校、コンセルヴァトワール出身で、舞台上に立っていたところをカヴァリエ監督に発見され、今回の抜擢となった。

撮影は「ディーバ」、「溝の中の月」などのフィリップ・ルーセロ。簡素な美術担当は、ジャック・ドミーとよく組んだベルナル・エヴァン。(1986年度/フランス映画/1時間30分)

今夏ロードショー シネマスクエア

特別鑑賞券 ¥1200 発売中(当日 ¥1500 均一の処)

とうきょう
新宿ミラノ座横3F (232)9274

全自由席定員制 ● 入替制

※満席および上映中の入場はできません。

連日 11:00 1:00 3:00 5:00 7:00

●毎金・土曜はレイトショー実施/PM9:00より